



「三国一の名物 寿命餅」



江戸期の文学作品に、加古川が度々登場します。江戸時代後期の上田秋成の読本『雨月物語』は、怪異小説9篇から成り立っています。そのうち、「菊花の約」の舞台が、播磨国加古（現在の加古川市）です。

同じく江戸時代後期に劇作家十返舎一九が著した滑稽本『東海道中膝栗毛』があります。弥次さん、喜多さんの珍道中を取り上げた楽しい旅の文章です。その続編として著

されたのが『続膝栗毛播州廻』です。播州の名所を廻り、

旅の楽しみである食べ物、出会った人々、各地の名所などをおもしろおかしく紹介しています。その中に登場するのが、現在加古川橋東詰にある「福中菓子舗」です。元々は尾上神社の茶店として店を営んでいたとのこと。播磨の名所「尾上神社」は、天然記念物「尾上の松」（3代目は国の重要文化財、現在の松は5代目）や無双の名鐘といわれる朝鮮鐘の「尾上の鐘」が有名で旅人の立ち寄る名所であったようです。「尾上の鐘」は、播磨の地誌『播磨鑑』に鐘を盗んだ海賊の話が登場するほどです。

その尾上神社を訪れた弥次さん、喜多さんが、食べると寿命が延びるいうめでたい名前の寿命餅を味わう場面があります。江戸時代有名だった銘菓は

時とともに忘れ去られていましたが、加古川市内の画廊に『続膝栗毛播州廻』が所蔵されているのがわかり、現在復活し、知る人ぞ知る存在となっています。私が訪ねて時はもう売れ切れとなるほどの人気です。



ぶらり加古川第 29 号

平成 28 年 6 月